Osaka University Knowledge Archive

Title	「死に関する情報」を含む映像による情動変化 : 映像に対する関心を中心として
Author(s)	尾崎, 勝彦
Citation	臨床死生学年報. 2003, 8, p. 65-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7829
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「死に関する情報」を含む映像による情動変化
－映像に対する関心を中心として－

尾　﨑　勝　彦

key words：映像，実験，情動変化，関心の高さ，デスエデュケーション

要　約

デスエデュケーションの最も単純な形態は、死に関する情報を映像などの視聴覚教材で提示し、その前後の情動変化を見ることである。そこで、死に関する情報を含む映像が、どの程度関心を持たれるのか、およびその関心の度合いと情動変化はどう関連するのか、を見出すことを本報の目的として、日常的にあまり「死」を考えることのない群－低関心群（専門学校生)、日常的に「死」 を考えることの多い群－高関心群（ホスピスボランティア）を対象として、死に関する情報を含む映像を提示し、その情動変化を測定するとともに、当該映像に対する関心の高さも同時に測定した。その結果、低－高関心群間で、映像に対する関心の高さの有意差が見られず、死に関する情報を含む映像は、多くの人に高い関心を持たれることが明らかになった。従ってその際の情動変化と映像に対する関心の度合いの関連は、明らかにすることができなかった。

1．緒言

21 世紀初頭までに予定されていたヒトゲノムの読み取りが 20 世紀に完了し、現在、各塩基の配列が如何なる機能を有しているのかという具体的な研究が進みつつある。また、脳死や臓器移植、クローン技術や胚性幹細胞、遺伝子組み替えなどの技術を医療へ適用するための研究も展開されている。「生命とは何か」という、ある種抽象的・哲学的な問いかけが今日ほど現実的・実用的な意味合いを持って議論されたことはいまだかつてなかったであろう。「生命とは何か」という問いかけが行なわれるとき、その対極の概念である「死」に対する問いかけも必然的に行なわれる。しかし、柏木（1996）が指摘するように、死が否定される時代にあっては、死は忌むべきもの、避けて通るものとして位置付けられ、これまでほとんど議論がされてこなかった。しかし、長期間にわたって死が否定される時代が続いてきたこと、および「生命とは何か」という問いかけが現実的・実用的な意味合いを帯びてきた今日において、死を議論していくことは必要不可欠である。

このような時代背景もあってか、近年「死」を正面から積極的に捉えてテーマとするデスエデュケーションへの関心が高まってきている。デスエデュケーションで、まず問われるのはその効果である。効果としては、死の不安や恐怖の軽減をとりあげられる事が多く、デスエデュケーション前後におけるそれらの変化を測定した研究が多く報告されている。しかし、これら

の示す内容は必ずしも一貫しておらず、死の不安や恐怖がデスエデュケーションによって軽減したとする報告（e.g., Durlak, 1978; Miles, 1980; Johansson & Lally, 1990；Berman, 1998-99）がある一方で、逆に増加したという報告（Bell, 1975; Combs, 1981; Wittmaier, 1979）もみられる。この状況は、デスエデュケーションの困難性を表していると同時に、そのプログラム内容の多様性、教育を施す側、および受ける側のパーソナリティや生活履歴の多様性などにより、結果が影響を受けるものと思われる。しかし、死は本来恐怖・不安の対象であり、死の不安や恐怖があるのは自然なことである（デーケン，1986）という立場からすれば、デスエデュケーションは、死を特化して考えるのではなく、誰にでも必ず訪れる死を通して自分の人生を見直し、生命の大切さ、自己の存在の唯一性などを考えるきっかけを与える（e.g.; 平山，1985；Hayslip & Cynthia, 1993；木村，1990；柏木，2001）ということがその目的となるだろう。デスエデュケーションのプログラムは、大別して教示的プログラムと経験的プログラムがあるが、最も単純な形態は、教示的プログラムで死に関する情報を含む映像などの視聴覚教材を提示し、提示前後での視聴者の変化を測定することである。

映像がその視聴者に及ぼす影響に関する研究は、特に暴力映像の及ぼす影響を中心に数多くなされている。古典的には、暴力行為の正当性が高く、それに対して報酬が与えられるような場合に視聴者の攻撃行動が促進される（Berkowits & Alioto, 1973；Hartmann, 1969；Huston-Stein, Fox, Greer, Watkins, & Whitaker, 1981；Green & Stoner, 1973；Bandura, Ross, & Ross；1963）というものである。しかし、現実的には暴力映像が提示されたからといってそれが直接に視聴者の攻撃行動を喚起するのではなく、さまざまな社会的抑制が働く。湯川・吉田（1997，p90）は、「こういった中で近年、暴力映像は直接的に攻撃行動促進に影響を与えるのではなく、認知および情動（感情・生理）といった変数が媒介するといった議論がなされている」述べており、Bushman & Green（1990）、Berkowits（1984）、Jo & Berkowits（1994）、吉田・湯川（1996）がその具体的な研究報告を行なっている。

ここまでをまとめれば、死を議論するべき時代にあって、デスエデョケーションに関心が持たれていること、しかし、その目的を死の不安や恐怖の軽減とした場合、必ずしも一貫した結果が得られず目的自体の適切性にも疑問があること、従って死を通して自分の人生を考え直すきっかけを与えることが適切な目標設定であろうことである。それを最も単純な形で遂行するならば、死に関する情報を映像などで提示することであるが、数々の暴力映像提示の研究結果の類推から、映像提示そのものが直接的に行動変容や促進には結びつかず、まず、情動や認知に影響をおよぼすだろう、ということである。しかし、死に関する情報を提示し、その前後での情動変化を報告した研究（Oranchak & Smith, 1988-89）は極めて少ない。しかもこのOranchakらの研究（1988-89）は死に関する情報を含む映像として、二輪車・自動車の交通事故を描写したものである。これは不安を喚起する目的で用いられており、デスエデュケーションとは文脈の異なるものである。

そこで、筆者は前報において、死に関する情報を含む映像を、若年層（学生）、および50歳以上の中高年層の被験者に提示したところ、若年層において情動変化が見られたものの、中高年層においては、まったくその変化が認められなかったことを報告した（尾崎，2001）。これは、当該映像が、死別などの喪失経験のほとんどない若年層の関心を惹きつけたのに対し、既に自身が喪失体験を経てきていることの多い中高年層の被験者は、若年層ほどには関心を示さなかったことによるものであろうと推測した。しかし、自分の関心の高い映像を提示された場

合、情動が変化するのは当然のことであり、これが、映像に含まれる死に関する情報そのものによって引き起こされたと結論することはできない。また、前報における被験者の提示映像に対する関心の有無は、自由記述の感想から読み取ったもので、実際に被験者がどの程度の関心を示したかということは未知である。

そこで、死に関する情報を含む映像が、どの程度関心を持たれるのか、およびその関心の度合いと情動変化はどう関連するのか、を見出すことを本報の目的とする。

2．実験手続き

2．1　被験者

日常生活において、あまり「死」を考えることのない群ー低関心群17名（女性14名、男性3名、M =20.2歳、SD =1.0歳）、および日常的に 「死」を考えることの多い群ー高関心群8名（女性6名、男性2名、M =31.8歳、SD =19.1歳）、の2群を設定した。低関心群として福祉専門学校の学生、高関心群としてホスピスボランティアを被験者として採用した。なお、本研究における低関心群・高関心群は、あくまでも2者を比較した場合に相対的に、関心が低い、または高いと推定される群であって、実際に低関心であったか、高関心であったかということとは無関係の群分けである。

2．2　実験日時・場所および状況

低関心群に対する実験は2002年1月30日に被験者の所属する専門学校の講義室において心理学の授業の一環として行なわれた。高関心群に対する実験は、2003年1月24日にボランティアの活動する病院内の会議室において、ボランティアの勉強会として行なわれた。

2．3　実験装置・実験課題

＜映像＞死に関する情報を含む映像として前報同様BBC制作の「ハービーやすらかに」を用いた。これは、末期がん患者（主人公ハービー）がその病名と予後を宣告されてから死に至るまでの家庭生活を描いたドキュメンタリーである。ハービーは、死を完全に受容していて、妻ハネロアや訪問ホスピスのスタッフ、友人達との時間を一日一日大切にして生活している姿が淡々と描かれている。プログラムの最後にハービーを看取ったハネロアは、「死によって彼が苦悩から解放されたと思う」と語る。自己の死を受容し、良好な家族関係、友人関係の中で死を迎え、また、周囲の人々も死に行くものに対して心限りのケアを与えている、いわゆるgood deathのひとつのあり方が表現されている。オリジナル映像は60分近くの長さのものであるが、20分に編集した。

＜質問紙＞映像提示前後に以下の構成からなる質問紙調査を行なった。

1）情動尺度POMS（Profile Of Mode States）日本版（横山・荒記，2000）：65項目からなり、「不安ー緊張」、「抑うつー落込み」、「怒りー敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」の程度を測定する。これら6つの得点を加算したものを「総合」値とも検討する。オリジナル版の回答は、「まったくなかった」（0点）ー「非常に多くあった」（4点）の5件法であるが、まったくなかった、非常に多くあった、というような過去形の表現から、過去の事実について回答するという印象を与える恐れがあるために、「まったくなかったような気がする」のように「ーような気がする」を回答文に付与した。さらに現在の気持ちを回答させるために、

「人の気分はちょっとしたことで変化するといわれています」、「あなたのいま、現在の気分状態をお尋ねするものです」という説明文を回答欄の前に与えた。

2）**フェイスシート**：年齢、性別、および氏名を記入させた。氏名はプライバシー保護のため偽名使用可能なこと、および偽名使用の場合は映像提示前後の2回の質問紙に同じ偽名を用いることが実験者によって口頭で教示された。

3）**関心の程度**：被験者が日常鑑賞する映像メディアで、最も関心を持っているもののジャンルを尋ねた。その最も関心の高いジャンルに対する関心の度合いを10として、提示映像の相対的な関心の度合いを1から10までの数値で回答させた。なお、この設問は映像提示後の質問紙にのみ掲載した。

4）**自由記述感想**：映像を見た後の感想・意見などを求めた。なお、この設問は必ずしも回答しなくてもよいことを質問紙表紙に文面で示した。この設問も同様に映像提示後の質問紙のみに掲載された。

2．4　実験手順

実験者が被験者に同意書を配布し、実験手順の説明を行い、実験に対する同意を口頭で求めた。なお、同意書には、実験手順の説明と共に、実験参加・不参加の自由、同意後の実験遂行放棄の自由に関する事項が含まれ、当該事項についてはさらに口頭による説明がなされた。同意書記入後、実験者が同意書を回収すると同時に1回目の質問紙を配布し、記入させた。被験者の記入終了を見計らって実験者が誤記入のないことを確認することを口頭で求めた後、質問紙が回収された。次に、実験者は映像提示の開始を宣言し、映像を提示した。映像プログラム終了後、実験者が映像提示終了を宣言し、2回目の質問紙を配布した。1回目と同様実験者が誤記入のないことを確認することを口頭で求めた後、質問紙が回収された。その後、実験者は被験者に対して、実験の全過程終了を宣言し、実験協力に対する感謝の言葉を述べ、実験の意図を説明した。

2．5　分析

分散分析、および相関分析をSPSS9.0J for Windows（SPSS. Inc., 1999）を用いて行った。なお、欠損値については、欠損値のある設問のその群における平均値を当該欠損部分の値として採用した。

3．結果

3．1　映像提示前のPOMS値

Table 1に映像提示前のPOMS値、および低関心群－高関心群間のt値を示す。すべての項目において有意差は見られなかった。「疲労」のみが低関心群においてやや高い値を示したが、有意ではなかった。

Table 1　映像提示前のPOMS値

		低関心	高関心	t値
緊張-不安	*M*	13.65	13.25	0.16
	SD	7.56	4.95	
抑鬱-落込	*M*	19.12	16.63	0.42
	SD	14.04	12.66	
怒り-敵意	*M*	12.59	14.88	-0.51
	SD	11.07	9.20	
活気	*M*	10.47	14.63	-1.30
	SD	7.99	6.14	
疲労	*M*	14.82	8.13	2.03^{+}
	SD	8.19	6.40	
混乱	*M*	10.94	11.34	-0.23
	SD	6.29	3.11	
総合	*M*	81.59	78.88	0.15
	SD	46.04	32.39	

+p＜.10

3．2　映像提示前後の POMS 値の変化

Table 2 に各群ごとの映像提示前後の POMS 値、および t 値を示す。低関心群、高関心群共に「怒り-敵意」、および「活気」が有意に低下した。さらに低関心群では、「疲労」が有意に低下し、「総合」の低下が有意傾向であった。高関心群では「不安-緊張」も有意に低下した。

3．3 映像に対する関心の高さ

Table 2　映像提示前後のPOMS値の変化

		低関心			高関心		
		提示前	提示後	t値	提示前	提示後	t値
緊張-不安	*M*	13.65	12.82	0.50	13.25	11.25	5.29**
	SD	7.56	9.12		4.95	5.52	
抑鬱-落込	*M*	19.12	18.47	0.29	16.63	20.13	-1.43
	SD	14.04	17.01		12.66	13.28	
怒り-敵意	*M*	12.59	8.35	2.71*	14.88	9.88	2.40*
	SD	11.07	11.30		9.20	10.91	
活気	*M*	10.47	7.29	3.13**	14.63	11.50	3.05*
	SD	7.99	7.92		6.14	6.82	
疲労	*M*	14.82	11.71	2.47*	8.13	6.75	1.10
	SD	8.19	8.66		6.40	5.34	
混乱	*M*	10.94	9.65	1.36	11.34	10.13	1.00
	SD	6.29	6.65		3.11	5.77	
総合	*M*	81.59	68.29	2.02+	78.88	69.63	1.74
	SD	46.04	49.41		32.39	35.20	

+p<.10, *p<.05, **p<.01

Table 3 に映像に対する各群の関心の高さ、および群間の t 値を示す。低関心群の方が、やや低い傾向にあったものの有意ではなく、低関心群、高関心群共に高い関心を示していることがわかった。

Table 3　関心の高さ

	低関心	高関心	t値
M	7.47	9.00	-1.86+
SD	2.15	1.20	

+p<.10

3．4　POMS 値の変化量と映像に対する関心の高さの関係

Table 4 に POMS 値各項目の映像提示前後の変化量（映像提示後の値－同提示前の値）と、映像に対する関心の高さの相関を示す。いずれの項目の変化に対しても、関心の高さは無相関であった。なお、前項で、映像に対する関心の高さに関して、低関心群と高関心群は、ほぼ同等の群と見なされることが示されたので、低関心群と高関心群を合わせて相関分析を行なった。

Table 4　POMS値の変化量と関心の高さの相関 (n=25)

	緊張-不安	抑鬱-落込	怒り-敵意	活気	疲労	混乱	総合
相関係数	-.148	-.171	-.010	.209	-.226	-.275	-.179
有意確率	.481	.413	.637	.317	.277	.183	.392

3．5　自由記述の感想

低関心群17名のうち12名、高関心群は8名全員から自由記述の感想が得られた。低関心群では、「ショックだった」、「気持ちが沈んでしまった」、などというどちらかと言えば感情的でネガティヴな感想と、「いろいろ考えさせられた」、「人間らしくていい」などという理性的で肯定的な感想が得られた。一方、高関心群からは、ほとんどが理性的で肯定的な感想が得られた。高関心群で感情的な感想を記述したのは、年齢の若い一人の被験者（以降、本報においてこの被験者を特異被験者と称する）のみであった。

4．考察

4．1　前報の結果との比較

Table 5 に前報、および本報における映像提示前後の POMS 値の変化（t 値）を示す。年齢的に前報における若年層が本報における低関心群に、また、前報における中高年層が本報における高関心群に相当するので、それらの比較を行なう。

若年層－低関心群において、「怒り-敵意」、および「活気」が共に有意に低下し、また、「総合」が有意または有意傾向の低下を示した。従って、これらについては、20歳前後の世代の者はほぼ一致した情動変化を示すことが分かった。「疲労」は今回の結果のみ有意な低下を呈していた。低下の一因として、映像提示前の「疲労」の値が高かったことが考えられる。そこで、「疲労」の映像提示前の値について若年層－低関心群でその差の検定を行なったところ、t=1.842、p=.075 で有意傾向にあり、弱いながらも初期値の影響が疑われる。また、前回の実験では、「実験」と称して被験者を募り（能動的参加）、小部屋で2～3人ずつの映像視聴であったのに対し、今回の実験では、講義室で多人数での映像視聴であること、さらに授業の一環として行なわれたので被験者としてはほぼ義務的に参加（受動的参加）していることになり、このような実験環境の違いも、「疲労」の初期値の大きさに影響をおよぼした可能性がある。

中高年層－高関心群では、前回の中高年層が「怒り-敵意」のみが有意傾向であっただけであるのに対し、今回の高関心群では、「不安-緊張」、「怒り-敵意」、および「活気」が有意に低下した。前回と今回のこれらの差について検討していく。変化量に影響をおよぼす要因として、映像提示前の値の影響、および実験条件の差異が考えられる。そこで、まず映像提示前の値の中高年層－高関心群間差を検討した結果、有意差は見られず、初期値の影響ではないことが明らかになった。次に実験条件の差異であるが、以下の点が、前回と今回での主な異なる条件である。①実験場所、②被験者の年齢構成、③被験者数、④共視聴者人数、⑤被験者の実験参加動機、⑥共視聴者の態度、である。以下これらの条件差について検討していく。また、映像に対する関心の高さも情動変化の要因と考えられるが、それについては次項で検討する。

①実験場所：前回の中高年層に対する実験は、被験者の便宜を考慮して、被験者宅、被験者の知人宅、公共の会議室、の3つの異なる環境下で行なわれた。今回の実験は前回の実験の行なわれた場所のいずれとも状況の異なる環境である。しかし、前回の実験において、変化量と実験場所の相関は見出されなかったことから、実験場所によって変化量が影響を受ける可能性は低い。

②被験者の年齢構成：前回の結果と比較検討するため、便宜上今回の高関心群を前回の中高年層と比較している。しかし、今回の高関心群の被験者の中には特異被験者が一人含まれている。これは、年齢的には低関心群に含まれるべき被験者（21歳）である。また、高関心群の人

数は少ないため、この被験者の回答が影響をおよぼした可能性が考えられる。そこでこの特異被験者を除いた条件（n=7, M = 61.3, SD = 6.8）で映像提示前後の差の検定を行なったところ、Table 3 や同 6 の結果に加えてさらに「疲労」と「総合」が有意に低下するという結果になった。このことから、特異被験者の回答が高関心群の情動変化量に影響をおよぼした可能性が否定された。

③被験者数：前回の実験における中高年層の被験者数は 22 名であり、今回はその約 1/3 である。前回に比べて被験者数が少ないためにたまたま偏った結果になった可能性が疑われる。しかし、これまでのいずれの実験条件においても有意にならなかった「緊張-不安」が、有意に低下した説明は、少ない被験者数の影響であるとは言い難い。

④共視聴者人数：Zajonk（1965）の社会的促進理論によれば、その場に他者が存在するだけで、優勢反応の表出が高められる。その一方で、Schacher（1959）の親和動機説によれば、他者の存在は不安を低減する効果がある。また、湯川・吉田（1998b）は他者の存在は、暴力映像によって生じるネガティヴな認知および情動の喚起を抑制するという仮説を実験で検証している。これらの報告はいずれも映像を視聴する被験者が単独であるか、複数であるかが実験変数になっているが、不安低減効果がもし共視聴者人数の増加関数になっているとすれば、今回の実験に表われた「緊張-不安」の有意な低下が説明できる可能性がある。前回が被験者 2 ～ 3 人で行なわれたのに対し、今回は 8 人で行なわれたからである。しかし、2 ～ 3 人で行なわれた前回の若年層と、17 人で行なわれた今回の低関心群の「緊張-不安」の低下はむしろ今回の方が小さかったことから、共視聴者人数の変化量およぼす影響の可能性も小さいものと考えられる。

⑤被験者の実験参加動機：前回の実験では、被験者は「心理学実験に協力する」いう意志を持って実験に参加した。これに対し、今回の実験では「ボランティアの勉強会に参加する」という意志で実験に参加している。今回協力をいただいたボランティアの勉強会は外部から講師を招聘し、講演を聴くというスタイルで行なわれることが多い。筆者は当該ボランティアのメンバーでもあるので、「外部からの講師」とは見なされない。勉強会では「死に関する情報の役割」というタイトルで筆者が議事進行を行なうということだけが知らされており、心理学実験を行なうということはほとんど知らされていなかった。また、このような形での勉強会は初めてのケースで、実験を始める段階で、「一体何をするのか、何をされるのか」といったような不安や戸惑いがあった可能性が考えられる。それが、如何にもホスピスボランティアの勉強会に相応しい内容の提示映像によって有意に低下した可能性が高いと考えられる。

⑥共視聴者の映像視聴中の態度：暴力映像視聴時に共視聴者が、当該映像に肯定的な態度を示した場合に、当該映像視聴者の攻撃行動が促進されるという報告を、Hicks（1968), Dunand, Berkowits, & Leyens（1984）、および湯川ら（1998b）が行なっている。このように映像視聴時の共視聴者の態度は、視聴者に影響をおよぼす可能性が大きいと考えられる。この点について、今回の高関心群の情動の変化を考える。前回の中高年層の実験において、映像提示中に涙ぐんだ被験者は一人も観察されなかった。それに対して今回の高関心群の実験では、特異被験者が涙ぐんでいるのが観察された。一方、前回の若年層の実験、および今回の低関心群の実験では、映像提示中に涙ぐむ被験者が何人か観察された。従って、既に喪失を経験している、あるいは日常的に死に遭遇する機会が多いため、死に関する情報を提示されたときに、特に情動が喚起されることなく直接自己や配偶者、家族の人生を省みることに結びつくと推定

される高関心群の中高年者が、特異被験者の涙ぐみによってある程度情動が喚起された可能性が考えられる。

Table 5　映像提示前後のPOMS値の変化、前報との比較 (t値)

	前報－若年層	本報－低関心群	前報－中高年層	本報－高関心群
n	22	17	23	8
M	20.3	20.2	62.8	56.3
SD	1.1	1.0	6.7	15.6
緊張-不安	1.42	0.50	-0.05	5.29**
抑鬱-落込	-0.89	0.29	0.57	-1.43
怒り-敵意	4.05**	2.71*	2.07+	2.40*
活気	4.94**	3.13**	0.87	3.05*
疲労	1.56	2.47*	-1.04	1.10
混乱	1.96+	1.36	0.53	1.00
総合	4.28**	2.02+	0.87	1.74

+p<.10, *p<.05, **p<.01

4．2　映像に対する関心の高さとの関係

本研究の目的のひとつは、死に関する情報を含む映像に対する関心の度合いと情動変化の関連を見出すことである。Table 4 の結果から見ればそれらは無相関で、死に関する情報を含む映像は、それに対する関心の度合いに拘りなく、情動変化をもたらす、ともいえる。しかし、Table 3 に見られるように、低関心群－高関心群間の関心の度合いの有意差はなく、かつ、低関心群、高関心群ともに、高い関心を示している。ゆえに、本実験の被験者はすべて、高い関心を示しており、関心の高い映像を視聴したがゆえに情動変化をきたしたとも言える。また、推測の域を出ないが、ホスピスボランティアの中高年者は、前回の中高年層のような一般の中高年層より、死に関する関心が高いために、情動変化をきたしたかもしれない。このようなことから、今回の実験では関心の高さと、情動変化の関連性について明らかにすることができなかった。

4．3　デスエデュケーションとしての映像

自分や配偶者、家族の人生について省みようとする旨の感想が、多くの被験者から得られた。このことから、本実験に用いた映像は、デスエデュケーションのプログラムとしては、適切なものであったといえる。しかしながら、その一方で「気持ちが沈んでしまった」、「人間の死ということを考えることがこわいと思った。考えるだけですごく不安になる。」などといった感想も少数ながら得られた。本実験に用いた映像は、「死ぬ」ということに関して死にゆく本人も、またその周りの人も非常に恵まれた状況で、充分なケアの後に good death を迎えている。それにも拘らず、ネガティヴな感情を喚起された被験者が少人数ながら存在した。このことは、デスエデュケーションのプログラムの構成や選択については、かなり慎重に行なわなければならないことを示している。今回の実験の被験者はすべて成人であったが、児童・生徒に対するデスエデュケーションはさらに慎重を期する必要があろう。

5．結言

死に関する情報を含む映像は、多くの人に高い関心をもたれることが明らかになった。また、その死に関する情報を含む映像を提示した際の情動変化と関心の度合いの関連は、明らかにすることができなかった。Good death を描いた映像でも、ネガティヴな感情を喚起することもあり、デスエデュケーションに供するプログラムの構成・選択は慎重を期する必要がある。

【引用文献】

Bandura, A., Ross, D., & Ross, S. A. 1963 Vicarious reinforcement and imitative learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology,* 67, 601-607

Bell, W. D. 1975 The experimental manipulation of death attitudes: A primary investigation. *Omega,* 35, 199-205.

Berkowits, L. 1984 Some effects of thoughts on anti-and prosocial influences of media events : A cognitive neoassociation analysis. *Psychological Bulletein,* 95, 410-417

Berkowits, L., & Alioto, J. 1973 The meaning of an observed event as a determinant of its aggressive consequences. *Journal of Personality and Social Psychology,* 69, 950-960

Berman, D. J. 1998-99 Attitude toward aging and death anxiety: Aging and death class. *Omega,* 38 (1), 59-64.

Bushman, B., & Green, R. 1990 Role of cognitive-emotional mediations and individual differences in the effects of media violence on aggression. *Personality and Social Psychology,* 58, 156-163.

Combs, D. C. 1981 The effect of selected death education curriculum model on death anxiety and death acceptance. *Death Education,* 5, 75-81.

デーケン, A 1986 死への準備教育第１巻 死を教える メヂカルフレンド社.

Dunand, M., Berkowits, L., & Leyens, J-P. 1984 Audience effects when viewing aggressive movies. *British Journal of Social Psychology,* 23, 69-76.

Durlak, J. A. 1978 Comparison between experiential and didactic methods of death education. *Omega,* 9, 57-66.

Green, R. G., & Stoner, D. 1973 Context effects in observed violence. *Journal of Personality and Social Psychology,* 25, 140-150.

Hartman, D. 1969 Influence of symbolically modeled instrumental aggression and pain cues on aggression. *Journal of Personality and Social Psychology,* 11, 280-288.

Hicks, D. J. 1968 Effects of co-observer's sanctions and adult presence on imitative agression. *Child Development,* 39, 303-309.

平山正実 1985 生と死の教育?とくに生涯教育の中で 樋口和彦・平山正実（編） 「生と死の教育？デス・エデュケーションのすすめ」 創元社, pp 144-169.

Huston-Stein, A., Fox, A., Greer, D., Watkins, B. A., & Whitaker, J. 1981 The effects of action and violence in television programs on the social behavior and imaginative play of preschool children. *Journal of Genetic Psychology,* 138, 183-191.

Jo, E., & Berkowits, L. 1994 A priming effect analysis of media influence : An update. In J. Bryant & D. Zillmann (Eds.), Media effects : Advances in theory and research.

Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. pp.43-60.
Johansson, N. & Lally, T. 1990 Effectiveness of a death education program in reducing death of nursing students. *Omega,* **22**, 25-33.
柏木哲夫　1996　死にゆく患者の心に聴く―末期医療と人間理解―，中山書店.
柏木哲夫　2001　ターミナルケアとホスピス　大阪大学出版会.
木村正治　1990　大学生を対象にした「死の教育」(Death Education) の実践とその評価.　学校保健研究, **32**, 443-450.
Miles, M. S. 1980 The effect of a course on death and grief on nurse's attitudes toward dying patients and death. *Death Education,* **4**, 245-260.
Oranchak, E., & Smith, T. 1988-89 Death anxiety as a predictor of mood change in response to a death stimulus. *Omega,* **19** (2), 155-161.
尾崎勝彦　2001　死の不安およびその他の情動に及ぼす「死に関する」情報の影響 臨床死生学年報, **6**, 29-38.
Schacher, S. 1959 The psychology of affiation. Stanford University Press
SPSS Inc. 1999 SPSS Base 9.0J user's guide. SPSS Inc.
Wittmaier, B.C. 1979 Some unexcused attitudinal consequences of a short course on death. *Omega,* **10**, 271-275.
横山和仁・荒記俊一 日本版 POMS 手引き　2000, 東京：金子書房.
吉田富二雄・湯川進太郎　1996　暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響 (1)―映像の分類：暴力性と娯楽性の観点から―　日本社会心理学会第 37 回大会論文集, 368-369
湯川進太郎・吉田富二雄　1998a 暴力映像が視聴者の感情・認知・生理反応に及ぼす影響　心理学研究, **69**, 89-96.
湯川進太郎・吉田富二雄　1998b 暴力映像と攻撃行動：他者存在の効果　社会心理学研究, **13** (3), 159-169.
Zajonk, R. B. 1965 *Social facilitation. Science,* **149**, 269-274.